1 公立ホールにおける邦楽公演の実例

熊本県立劇場は，昭和57（1982）年に開館しました。クラシック音楽専用の残響の長いコンサートホール（1,810席）と，オペラ，バレエ，演劇，伝統芸能などに適した演劇ホール（1,172席）という2つの専門ホールを併設した複合施設です。

熊本県立劇場ではほかの多くの公立文化ホールと同様，クラシック音楽や演劇をはじめ，バレエ，伝統芸能など様々な自主文化事業に取り組んでいます。また最近では，ホール職員やボランティアなどの人材育成にも力を入れているところです。

今回の講座では日本の伝統音楽や芸能がテーマとなっていますが，ここではこれまでに取り組んできた4つの邦楽事業を取り上げ，事業の概要や制作プロセス，成果や課題などについてご紹介します。

1 公共ホールの協働

最初の事業は，「邦楽ワークショップと『邦楽の世界』」（平成14年度）です。熊本県立劇場が自ら制作した事業を県内市町村ホールに派遣し共催で実施するもので，熊本市の北東に位置する合志町（現合志市）と協働して取り組みました。

その内容は，平成14年度から改訂・施行された新学習指導要領を受けて，中学校でのワークショップと演奏会を組み合わせたものです。

ワークショップは，合志中学校の2年生4クラスを対象に実施し，三味線，箏，尺八，篠笛をクラスごとに分けて体験していただきました。

この事業は，邦楽としては初めての取り組みでしたが，比較的うまくいった裏には幾つかのポイントがあります。

まず1点目は，合志町文化会館は開館当初から，担当職員を熊本県立劇場に派遣し研修させていたため，熊本県立劇場職員との人的つながりが出来上がっていたこと。2点目は，音楽の先生方は和楽器指導の経験がなく，また楽器も揃っていない中で，学習指導要領改訂のタイミングに合わせて実施を呼び掛けたこと。3点目は，使用する和楽器は，熊本市民会館が数年間実施していた「和のスクール」というワークショップで使っていたものを無償で借りることができたことの3点です。

この事業の大きな成果は，まず中学生がワークショップで和楽器を体験しただけでなく，一部の生徒は演奏会で「さくらさくら」を演奏し，達成感を得られたこと。また，地方では鑑賞する機会の少ないプロの和楽器演奏を多くの中学生が生で聴くことができたこと。さらに，約600席のホールの半分以上を集客することができ，町の文化会館事業としても成功したことでした。

一方，課題もありました。翌年度以降，合志中学校のように和楽器体験に積極的に取り組む学校，あるいはそれを後押しするような市町村ホールが出てこなかったことです。残念ながら，この事業は次年度以降継続できず，1年で終了することになりました。

2 アウトリーチによる学校への普及

2つ目の事業は，学校へのアウトリーチと演奏会を絡めた「邦楽地域活性化事業」（平成22年度）で，東京にある財団法人地域創造との共催で実施しました。熊本県立劇場ではこの年より6年前の平成16年，同じ地域創造が実施する公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業というクラシック音楽のアウトリーチ事業に取り組んでいました。これは体育館で全校児童を対象に行われる学校鑑賞教室と違い，クラス単位の少人

数で行うものですが，事前に実施会場を下見して，音楽室などの形状に応じて演奏者と子どもたちの座る位置を変えたり，参加する子どもたちの学年によって，話し方や内容，曲目を変えるなどして，音楽にあまり興味のなかった子どもたちにも楽しめるようなプログラム作りを行っています。

私はこうしたきめ細かい取り組みを経験し，事業効果の高さも実感していましたので，その後も県内各地で同様の事業を継続実施していました。邦楽地域活性化事業は，その邦楽版とも言えるもので，この年は県内の荒尾市，宇城市，人吉市の3か所で実施しました。

この事業は，地域創造が若手のプロの演奏家を全国から選考し，3人の演奏家と1人のコーディネーターを1組として合計3組を熊本県立劇場に派遣します。

彼らは熊本県立劇場でプログラム作りを行った後，県内3市に派遣され，学校でのアウトリーチとホールでの演奏会またはワークショップを実施。3市での事業が終わった後，9人の演奏家全員が熊本県立劇場に再び集まって，3組合同のガラコンサートを行いました。

地域での活動について，人吉市を例に取ってご紹介します。派遣されたのは，三味線の菊央雄司，箏の伊藤志野，尺八の小林鈴純の3人。人吉東小学校では地歌のアウトリーチを行いましたが，三味線の菊央さんが自ら作った紙芝居で，「蛙（かわず）」という地歌を，歌詞とともに子どもたちにストーリーを分かりやすく紹介しました。

この事業では，地域創造と連携して取り組むことによって，第一線で活躍する演奏家とコーディネーターの助言のもと，充実したアウトリーチプログラムを実施できました。また，熊本県立劇場のスタッフのみならず，本事業に参加した県内3ホールの職員が，邦楽器に関する知識や，その取扱いについて学ぶ機会にもなりました。

その一方で，様々なスタッフとの連絡調整やコンサート，ワークショップの準備など，業務が幅広い上に錯綜していたため，最後のガラコンサートでは集客に向けた準備が不十分で，想定した入場者数が達成できなかったことが反省点でした。

3 演奏家との協働

3つ目の事業は，邦楽地域普及事業（平成23年）で，鑑賞型と呼ばれるプロの演奏家による演奏会に，アウトリーチやワークショップを加えた事業として実施しました。

現代箏曲界を代表する野坂操壽，沢井一恵による「ふたりのマエストロ －変絃自在－」というツアー公演のスタートを，コンサートホールで実施しました。アウトリーチは，前年より縮小しましたが1町で実施。さらにワークショップは，これまで実施していなかった熊本市内で初めて実施しました。

「ふたりのマエストロ」の沢井さんは昭和54年，夫の忠夫さんとともに沢井箏曲院を創設。野坂さんも同じ生田流の箏奏者ですが，伝統にとらわれず二十絃箏や二十五絃箏を発表するなど，楽器の開発にも積極的に取り組んだ方です。

会場のコンサートホールは生の演奏に適していますが，当初は1,800席余りの大ホールでマイクを使わずに演奏するのは厳しいのではないかと懸念されました。しかしソロの演奏も含めて，この2人の迫力ある演奏は，何の問題もなく観客にしっかりと届けることができました。

フィナーレでは，地元の箏奏者が2人のマエストロと共演するなど，従来の箏の発表会にはな

かった企画で600人を超える入場者を集めることができました。この企画は，もともと地元の箏演奏家の先生方からのリクエストに応えて実現したものだったため，集客にも協力いただけたことがその要因です。

新たに取り組んだ夏休みのワークショップでは，ふだん本物の楽器や生の音色に触れる機会の少ない，笙，篳篥，龍笛，琵琶で実施しました。小学生が親子で参加したり，中学生が友達同士で気軽に遊びに来て篳篥を体験するなど，開催は1日だけでしたが参加者数は277人に上りました。

この事業では，現代邦楽の第一線で活躍する2人の奏者による質の高い演奏を聴く機会を設けたことと，併せてこの2人と地元の演奏家が共演できたことが大きな成果でした。また，地域創造と連携して取り組んだアウトリーチ事業を，単年度で終わらせず継続できたこと。さらに，ワークショップを熊本市内でも実施して，子どもから大人まで参加者の幅を広げることができました。

ただ，「ふたりのマエストロ」のチケット販売は，9割以上が地元の先生方を通して購入されたもので，一般への浸透という意味ではまだ不十分だったと言わざるを得ません。

4 音楽監督との協働

最後は，熊本県芸術文化祭のオープニングステージ「邦楽」（平成30年）です。熊本県と熊本県文化協会，熊本県立劇場の3者が毎年秋に実施する熊本県芸術文化祭のオープニングを飾る創作ステージとして取り組みました。

邦楽をこの年に初めて単独で取り上げることができた理由は3つあります。

まず，これまで述べてきた自主文化事業などを通して県内に邦楽が少しずつ浸透してきており，集客を含め事業として成立させる見通しが立ってきたこと。次に，翌年開催が予定されていたラグビーワールドカップ，世界女子ハンドボール大会という国際大会に向けて日本の伝統文化を盛り上げる好機と捉えたこと。3つ目は，熊本で生まれ，後に東京に出て九州系地歌を全国に普及させた長谷幸輝検校の没後100年を2020年に迎えるに当たり，熊本ゆかりの邦楽演奏家や九州系地歌を県民に広く紹介できる機会と考えたことです。

企画に際しては，おもに次の3点をポイントとして考えました。

1点目は，熊本県立劇場のスタッフでは邦楽に関する知識や国内の演奏家とのネットワークが不十分と判断し，実力・知名度の高い演奏家を音楽監督に迎え，見応え，聴き応えのある魅力的な内容とすること。

2点目は，集客を図るためだけに地元出演者を多数出演させるような発表会にはせず，内容，構成，出演者にこだわり，この機会でしか実現できないようなステージをつくること。

3点目は，こうした企画内容を効果的に広報し，販促につなげるため，マスコミが取り上げたくなるような様々な仕掛けを行うことによって，邦楽のさらなる普及につなげるというものです。

1点目の音楽監督について，まず頭に浮かんだのは尺八奏者の藤原道山さんでした。演奏家としての実力は言うに及ばず，ジャンルを超えた人気，様々な事業に果敢に挑戦し成功された実績，さらに熊本の邦楽演奏家とのつながりなどから，ぜひお引き受けいただきたいと考えました。

藤原さんは私にとっては初対面の方でしたが，制作統括である私が説明した事業趣旨を理解し，快く引き受けてくださいました。その後は，“豊かな水に恵まれるとともに，阿蘇に象徴される火の国”という熊本のイメージをもとに，“流れゆく水，炎の躍動 ―熊本の大地によせて―”というサブタイトルを決めていただき，前半は水，後半は火をテーマに全体を構成していただきました。

構成，演出のみならず，主だった出演者や委嘱作品の作曲依頼，集英社から出版されている漫画『この音とまれ!』の作家アミューさんへのキービジュアルの作成依頼など，音楽監督の領域を超えて動いていただきました。

第 60 回熊本県芸術文化祭　オープニングステージ「邦楽」
流れゆく水、炎の躍動 ―熊本の大地によせて―

曲　目	作曲等	演　奏
アメージング・グレース	スコットランド民謡	藤原道山(尺八)
「水の風景」より 第1，3楽章	藤原道山(作曲)	風雅竹韻(尺八)／熊本箏演奏者協会
ロンドンの夜の雨	宮城道雄(作曲)	渡部祐子(十三絃)
紺青 ～十七絃箏のための～	田丸彩和子(作曲)	小路永和奈(十七絃)
琵琶行	伊福部昭(作曲)	松下知代(二十五絃)
地歌「笹の露」	島田両造(作詞) 菊岡検校(作曲)	藤井泰和(三絃)／福田栄香(箏)／藤本昭子(三絃)／藤原道山(尺八)
和太鼓と尺八による 「炎の鼓動 ～肥後の鼓舞によせて～」	上野秀喜(作曲) 藤原道山(構成)	風雅竹韻(尺八)／必由館高校和太鼓部(和太鼓)
焔 ～十七絃独奏と箏群のための	沢井忠夫(作曲)	LEO(十七絃)／芸文祭箏アンサンブル
大地へ 第1，2楽章	大島ミチル(作曲)	藤原道山，風雅竹韻(尺八)／熊本箏演奏者協会(箏)／必由館高校和太鼓部(和太鼓)／芸文祭箏アンサンブル(弦楽)

私は，できるだけ多くの機会を捉えて藤原さんと意見交換を行うとともに，音楽監督の様々なアイデアを活かし，実現するよう努めました。

2 点目のコンサート内容は上の表にあるとおりですが，九州系地歌や長谷幸輝検校ゆかりの演奏家を招いて“熊本色”を出すこと，次の時代を担う地元の若い演奏家たちの目標となるような全国で活躍する若手演奏家と共演できるステージを設けること，邦楽器だけでなく洋楽器も加えた編成の壮大な曲でステージを締めくくることなどが要素として盛り込まれました。

3 点目のコンサート成功に向けた仕掛けとしては，まず 4 月に制作発表を行い，熊本県立劇場館長の姜尚中，音楽監督の藤原さんほか関係者が一堂に揃って会見し，藤原さんには内容，見どころなどをアピールしていただきました。

続いて 6 月には，関連企画としてセミナーを実施。公演本番に出演する藤原さんと，司会の葛西聖司さんによるトークで，伝統音楽の世界を分かりやすく解説していただきました。

そして本番直前の 8 月には夏合宿を開き，本番の共演に向けた仕上げのリハーサルを行いました。

藤原さんがリーダーを務める尺八アンサンブル「風雅竹韻」と熊本市立必由館高校和太鼓部による合同練習，人気箏奏者 LEO さんと地元で箏を学ぶ小学生から高校生たちとのリハーサルは，若い演奏家たちの本番に向けたモチベーションを上げるには十分な効果がありました。

チケットは全席指定で，地元邦楽演奏家など出演者にチケットを預けることはせず，全てプレイガイドで販売しましたが，1,000 枚以上を販売。当日の入場者もほぼ満席という盛況でした。

5 まとめ

これまで述べた邦楽事業の集大成とも言うべきこの事業の成果として次の 4 つが挙げられます。

①県内の邦楽の先生方による一致協力した体制ができた

②若い演奏家たちが一流の演奏家と共演する機会を得て大きな刺激を受けた

③邦楽，洋楽，それぞれの演奏家たちの共演を通して，お互いの音楽を知る機会となった

④音楽監督の巧みな構成と，すばらしい演奏家たちにより，これまで邦楽演奏会に足を運ばなかった聴衆を増やすことができた

こうした成果が上がった一方で，熊本の邦楽を今後どのように発展させていくかといった議論にはまだつながっておらず，今のところ先が見えていないという課題も残っています。　（本田恵介）